和文教科書

更科日記

六巻

成五十七年

共八

ホ 2
218
6

NO 218
門 利法
號 巻 6

東京帝國大學圖書之印

女教科書六之巻

美濃　源歌子　編輯

更科日記

菅原孝標女

東路の道のそてよりも、なほ、たゝつかさよ、おひいでたる人いとゝかりそめあやしかりけむを、いのよ、思ひそめけることゝて、その中よ、物がふりといふ物の、あんなるを、いとゝでもそやとおもひつゝ、つれゝなるひるまよりひるなどよ、姉継母などやうの、人々の、その物ごゝろ、かの物がゝ

さぶらふたちの下まとを文字のあるべきを省けり。

り、光る源氏の、あるやうなど、ところ〳〵かくるを
ゆくよ、いとゞゆうしさまされど、さぞ思ふまく
よそらよいかでか、おぼえかたくむ。いみじく心
もとなきまゝよ、こうちんよ、薬師佛をつくり
て、ほあらひなどして、人まよみそかよいりつゝ、
京よ、いとくあげたまひて、物がたりの多くさぶら
ふなる、あるかぎり、見せ給へと、分をすてゝ、ぬる
をつき、祈りやすほどよ、十三よなる年、のぼらん
とて、九月三日、かどてしていまたちといふ所よ
うつる。年ごろ遊びなれつる所をあらそよ、ほぼ

見すて奉るの下まとが文字のあるべきを省けり。

ちちらしてたち騒ぎて、日のいりぎわの、いとす
ごく、霧ふたがりふるよ、車よのるとて、うち見やり
されど、人まよそ、ふりつゝ、ぬるをつきし、薬師佛
の、こちたくまくるを、見すて奉る、悲しくて、人さえ
ず、うちなかれぬ。かどてしたる所を、めぐりなど
もなくてかりそあのかや屋の都などもなし。す
だれかけ、幕などひきたり。南ハたるかよ、野のか
さ見やらる。東西よ、海近くて、いと物もしろし。夕
雾たち渡りて、いみじう物がうしけれど、あさいな
どもせず。かゞり火つくゝをたちなんゝとも、

あそれよかなりきよ、同じ月の十五日、雨かきくらしふるよ、さめひをいで、ゆ野の國のいでゝといふ所よりとまりぬ。家などもうきぬべうりよ、雨ふりなどすれど、おそろしくていもねられず。夜中よ、風だちふる所よ、たゞ、木ぞうつたてる。其日も、雨よぬれふる物どもほし、國よたちわくれふる人々まつとてそこよ、日をくらしつ。十七日のつとめてたつ。昔下總の國よ、まゝの長といふ人住みけり。引馬も千むらまむらおらせ、さらさせけるゞ、家の跡とて、涼き川を、おしまて渡る。昔の、門の柱のまゞ殘りふるとて、おほきなる柱、川の中よ、四つたてり。人々、哥よむを聞きて、心のうちよ、

くちもせぬそこの川ぞら、殘らずぞ昔の跡をいふでもちまゝ、その夜をくらどの濱といふ所よ、とまる。かゝつのうを、廣濱なる所のずなど、もるゞと、白きよ、松原もげりて月いみゞうあかきよ、風の音もいみゞう心ぼそし。人々、おそうしがりて、哥よみなどするよ、

まどろまゞらよひなうらでをいつるみんゞ

ろどの濱の、秋のよの月、そのつとめてそこをたちて下総の國と、武藏の境まであるふとみ川といふぶかみのせまつとの、ほとりの津よりまりて、夜ひとよ、舟まてかづ〳〵物などとらす。乳母なる人も、男なども、なくなりてきかひまて、子うみうしなうでたちなれて、ごちよのぼる。いと悲ひしけれど、いとのまほしく思ふよ、せうとなる人いざきて、おていきつる。みな人も、仮初のかりやなどいへど、風すさまじく、ひきつるなども、志などしたるよ、これも、男などもそそねど、いとてそな

ふしつるの下るそをを文字のあるべきを省けり。

ちよ、あらく〳〵しげまて、苫といふものを、ひとへ、おふきたれば、月残りなく、さし入りたるよ、紅のきぬ、うへまきて、おなやみてふしつる。月氣さやうの人まそこよなく過ぎていと白く、清げまて、孫らしと思ひてかきなでつゝ、うち泣くをいとあそれよ、見すてがたく思へど、急ぎゐるてとろろく心地、いとあこのずつりなり。保よ、おぼえて、悲しけれど、月の興もおぼえず、くんづふしぬつとめて、舟よ車かきすゑて、濱てあなたのきしよ車ひきたてゝ、おくりまきつる人々、これより、みな帰

りぬ。のぼるそ、どまりなどしていき別るゝほど、行くもとまるも、みなたなきなどす。をさなき心地よも、あそれよみゆ。今そ、武蔵の國よりぬ。ことよ、おのゝき所もをそえず。涙もずなごゝなどもなくゝひぢのやうなて、紫おふと、ゆく野も、蘆荻のみゝるゝおひて、馬よのりて、弓もゝるすゑをえぬまで、たゝゝ生ひたちげりて、中をとけ行くよたけしぞといふ寺あり。そるかよいゝさらふといふ所の、ろうのあとの、柱礎などあり。いかなる所ぞとそゝぬ、是をいゝへ、竹芝といふさるなり。國の人

ひゝえを、直柄まそずぐまず げゝる、栖なりとぞ。

のありけるを、火たき屋のひたゝ衛士よさゝ奉りたりけるよ、御前の庭をくくとてなどや若しきめををゝらん。をゝの國よ、七つ三つ、作りすゑたる酒壺よさゝ酒ゝるひたえの、ひさごの、南風吹けば、北よなびき、北風ふけば、南よなびき、西吹けば、東よなびき、東ふけば、西よなびゝを見てかくてあるよと、ひとりごちつゝぶやきけるを、その時帝の御むすめ、いみじうかゝづのれたまふたゞひとり、御簾のきえよ、立いでたまひて、柱よりかゝりて、御覧ずるよ、此男のかゝひとりごつを、

いと憎れよ、いとのなるひさごの、いとのよ靡くらん
といみじう、ゆかしくおぼされけれどみすがー
あけて、あの男、こちよりれと、めしけれどかしこま
りて、高欄のつらよ、まゐりたりけれどいひつる
らと、今ひとかくり、我よいひて、角のせよと仰せ
けれど、酒壺の事をいまひとかくりまらしけ
れど、我みていきてゐせよ。さいふやうありと、仰
せられけれど、かしこまりそろしく思ひけれど
さるべきよやありけむ、おひまりてくだるよび
んなく、人おひて来らんとおもひて、その夜瀬多

迎げるのトまもよ。文字のあるべきを省けり。

の橋のもとよ、四宮をずゐ奉り、せたの橋をひと
まどかりらぼちてそれをとびしてらの宮を、
かきおひ奉りて、七日、七夜といふよ、武蔵の國よ、
いまつきけり。帝、后、みこうせたまひぬとおぼし
まどひもとめたまふよ、武蔵の國の衛士の男な
んいとかうぞきものを頭よひきかけてどぶ
やうよ迎げるとまうしいでらの男を、弱ぬ
るよなかりけり。ろんなくもとの國よこそ行く
らあとおほやけより、使ひくだりておふよせた
の橋のらぼれてえゆきやらず。三月といふよ、武

いかよあれとも一本よいかてあれとともあれぐも車の煮きこえがさし前後よ脱文あるべし。

蔵の國よいきつきてこの男を殺めるよ此御子よ、おほやけづのひをめしてこれさるべきやう有りけんこの男のあるじゆかしくてみて徒けといひしこのぞみて来ること。いみじくこそありよくおぼゆこの男罪しかうぜられぬ我をいかよあれとこれもさきの世よ此國よ路をたるべきすくせらそありけめやや帰りておほやけよ此よしを奏せよと仰せられけれぬいそんこのなくてのぼりて帝よかくなん有りつると奏しけれぬいふかひなし。その男をつみしても今を此宮をと

すませ奉りける家をの家も誤りなりんなくてよき所なり。

りかへし都よかくし奉るべきよも、あらず。たけしその男よいけらん世のかぎり武蔵の國をあづけとらせておほやけごともなさせじ。たゞ宮よその國をあづけきらせたまふよしの宣旨下りよけれぬ此家を内裡のごとく造りてすませ奉りける家を宮などうせたまひよけれぬ寺よなしるをたけしぬ寺といふなり。その宮あうみたまへることもそやがて武蔵といふ姓をなんありける。それより後此たきやよ女をなりとかくる。野山蘆荻の中をくるより外の

ことなくて、ひさしと、さゞみとの中よ、あすゝ
川あり。在五中将の、いざこととゝちんとよみけ
る、ゝゝなり。中将の集よ、すみぞ川とゝ。舟
まてゝゝりぬれど、相摸の國よりぬ。よゝとみ
といふ所の山、ゝよくかきたらん屏風をたて並
べたらんやうなり。かゝつゝを、海濱のさまも、
よせくる波のけしきも、いみじうおもしろし。
もろこし河原といふ所もすなごの、いみじう白
きを、二三日ゆく。夏を、倭なゝこの濃く薄く、錦
をひけるやうよなん、咲きたる。これを、秋の末な

見えぬのぬを、ずのあやまりなるべし。ぬよてもてらをを頭ひがゝし。

れど、見えぬといふよなほ、所々を、ちらぼれつゝ、
あそれげよ、咲きゝゝ。ゝゝ河原よ倭な
でしこも、咲きけんそなど、人々おそろしげよく
足柄山といふを、四五日かねて、おそろしげよく
らがり渡れり。やゝくいりゝつ、蘇のほどよ、空
のけしきをこのゝくもゝえず。えもいそず、志
げりゝりて、いと帰ろしげなり。林よやゝりた
る所よ、月もなく、晴き夜の、やみよまぐふやうな
るよ、あそびこ人、いゝくよりともなく、生で来。
り。五十ばかりなるひとり、二十ばかりなる、十四

まゞといふのゝ下まえ脱文あるべしものといふ語どもをや添ふべからん。

五なることあり。庵のまくよりからうさをさゝせて、
居ゑゝり。男ども、火をとりて見れば、昔こゝに
といひけんおまごといふ。いと長く、ひゝいと
とよくかゝりて、色白くきたなげなくてきても
有りぬべき、やづかへなどまても、ありぬべくな
ど、人々あそびゝるよ。聲すべて似るものもなく、
えもすみのぼりて、めでたく、歌をうゝふ。人々い
みじう情ありて、けぢうくて、人々、もて興ず
るよ、西國のあそびもえかゝらじなどいふを少
きて、雜波もゝうまくらぶれどとめでたくう

あるのゝ下まえを文字のあるべきを省けり。

流れるのゝ下まもを文字の

ひゝり。見るあのいとときゝなげなきよ。聲さえ似
る物なく歌ひてさゞかり、遥ゝしげなる山中よ、
たちて行くを人々あかず思ひて、皆なくを、幼な
き心地まえまして、凶やどりをたゝん事さへあ
かずおぼゆ。まゝ、曉より、道柄をこゆ。まいて、山の
中のおそろしげなる事いとものうなり。雲もあ
しのゝ下ふまる。山のなゝうだかりの、ものゝ下の、
ものづのなるよ、あふひの、たゞみすぢなるもあり、
世ぞたれて、かゝる山中よりも、まひけんよとゝ
々あそびゝるぞる。水もそのゝよ、三所よ流れたる。か

あるべきを省けり。

らうゝして越えいでゝ、関山よりとゞまりぬ。そよりを、駿河なり。よこぢりの、関のかゝそらよ、岩つぼといふどころあり。えもいそず、おほきなる石の、よそうなる中よ、穴のあきたる中よりいづる水の、きよくつめたき事、かぎりなし。富士の山を、四國なり。ゆゝ生ひ生ひ、國をてを、西北をてよ、見えゝ山なり。その山のさま、いと世よ見えぬさまなり。さまことなる、山のすゞしさのゝんぢやうを、ぬりたるやうなるよ、雪の消ゆる世もなく、つもりたれば、色ときぬよ、ちろき袖きたるんやう

よ見えて、山のいたゞきの、すこゝしたひらぎたるより、烟を、立ちのぼる。夕暮を、次の、きえそろもえゆ。清見ゞ関を、かゝるつのくを、海なるよ、関屋ども、あまた有りて、海までくきぬきゝたり。げぶりあふるやあらむ、清見ゞ関の波もたゝくなりぬべし。おもしろき事、かぎりなし。田籠の浦を、波たかくて、船をてこぎあぐる。大井川といふ、渡りあり。水の、岸の常ならず、すりこなどをこくてなゞしゝんやうよ、白きあをやくなゞしゝ。ふゞ川といふを、富士の山より、落ちたるなり。その

國の人の、生でくかゝるやう、ひとゝせ須物よまかりたりしよいとあつうりしのだ、此水のつらよ、やすみつゝ見れば、川上のかゝより、黄なるものながれきて、船よつきてどゞまりゝるを見れば、ぼぐなり。とりあげて見れば、黄なる紙よりて、濃くうるそゝくかゝれたり。あやゝくて見れば、来年、なるべき國どもを、除目のこと、みなかきて、此國、来年あゝべきよも、めみなりて、又そゝくて、二人をなりたり。怪しあさましと思ひて、とりあげて、ほしてをさめたりしをかくる年のつゝのこと、よ、

かみなりてを、守なくてを寫し誤れるよもやあらんなれども、誤脫あるべし。

この文よかゝれりし、ひとつたがはず、此國の、守とありしまゝなるを、三月のうちよりなくなりて、又なりのそりゝるもらの侍らよかきつけられりし、人なり。かゝることもむ者りし。来年の、司めしなどを、ゝとし、此山よそゝぐくのかみぐ、あつまりてないたまふなりけりと、見たまくし、殊らこのなる事よさぶらふとかゝる。ぬまゞりといふ所も、すゞくとすぎていみゞく頃ひ如でく、遠江よかゝる。佐夜の中山など、越えけんほどもおぼえずいみゞくるしけれど、天龍といふ川

のつらよ、假屋つくりまうけつくりけれだ、そこよて、日ごろすぐるほどよりそ、やうゝをそこるぞ、深くなりぬれど、河風烈しく吹き上げつゝたゝへがたくおぼえけり。そのころ、濱名の橋よりつゝ、濱名の橋ついふり。濱名の橋ぐぶりし時を、黒木を渡したりし、巻尾をあとゞよ見えねど、舟よてこゝる入江よ渡りし橋なり。との海をいとゝいみゞくあらく、波高くて、入江のいゝづらなるすゞもよゝとも物もなく、松原の、茂れる中より、浪のよせかゝるもいゝろゝのおのやうよ見えまゝとよ、松の末

渡しゝうしの下ゐを、が文字のあるべきを、省けり。
渡りし　を、一本ゐを渡せしともあるをみれど渡せりしとありしを、誤寫せしゝゆゑ、

より、波をゞゆるやうよ見えて、いみゞくおもしろし。それよりかみを、井のをなといふさかの、えもいそずゐびきをのぼりぬれど、三河の國の、高師の濱といふやうゝをなのみして、橋のかゝもなくなよの見所もなし。二村山の中よりたる夜、大きなる、榊の木のもよ、庵をつくりたれど、松ひとよ、庵のうへよ、かきの、落ちかゝりたるを人々ひろひなどす。宮ぢの山といふ所、ゆるほど、十月晦日なるよ、紅葉してさかりなり。

嵐ふそ吹きゝぐりけれ宮ぢ山、まゞもみぢ

ぞのちらでのうれる、三河と尾張となる、ちかす
がのまつり、げよ、おもひまづらひぬべくおぼし。
尾張の國なる、みの浦を過ぐるよ、ゑーほたぐみ
ちよみちて、こよひ、宿るうんもちうげんよ、しほ
みちきなぞ、こゝをも過ぎ、とあるかぎり、さう
まどひすぎぬ。美濃の國なるさかひよ、ずのまく
といふまつりして、野ごみといふ所よつきぬそ
こよ、あそびどもいでまて、夜ひとよ、歌うたふよ
あーがらなりし、思ひをでられてあそれな慈ひ
しき事、かぎりなし。雪降り、あれまどふよ、もの

あーがらなりしのてをを。文字のあるべきを省けり。

無もなくて、不破の関あつみの山などこえて、近
江の國、おきなるといふ人の家よりやどりて、四五
日あり。みつさる山のふもとよりひるもぐれ
あられ降りみだれて、日の光りもさやのならず。
いみーうものむつまーぞこをたちていぬぞみ、
かむざき、やすくるもとなどいふ所々なるよとな
くすぎぬ。湖のおもてをるぐとしてなでーま所
生嶋などいふ所々のみえるいとおもしろし。
せきのそ、みなくづれてもりまづらふ。栗津
よりてさそすの二日、京よりぐらくいき

つゝぬと、中の時ぞかりよ、立ちてゆけど、関ちゐくなりて、山づらよりかゝりてあなる、きりかけといふものゝ立つる、かみより、丈六の佛のいまゝ、あらづくりよりおそするゞ、顔ばかり、みやられたり。あをれよ人ぞなれていづくともなくて、おそするゝ佛のなとゝうちえやりてすぎぬ。こゝらの、國々を過ぎぬるよ、駿河の清見ゞ関と、相坂の関とぞかりをなかりけり。いと暗くなりて、三條の宮の西なる所よ、つきぬ。ひるゝあれゝる所の、過ぎまつる、山々よりもおとらず、おほきよ、おそろしげなる、源山木どものやうして、毎なくなりまし、めひゝどもも、うまれしようひとつまてよるそ、左右よふしおきするもあそれなよおもひもでられなどゝて、心もそらよなゝめくゝさる。たちぎゝかいまむ人のけをひしていとゝいみゞくもつまし。十日ばかりありて、まかでたれゞてゝ、すびつよ、火などおこしてまちゐたりけり。車よりおりたるをうち見て、おそする時ゝそ、ひとあもゝえさぶらひなどもありけれ。このゐごろを、人ぶゐもせずまへよ、人かげもみえず。いと心ぼそ

ゆびしゐうつるのゆゑ。文字のあらべきを省けり。

く、ゆびしゐうつる。かうてのみも、まろがみをぞ、いとのぐせむとのするとゝうちなくを見るもいとかなしつゝあてもゝ今日を、かくておもをすれば内外、人おほくゝようなくゝみぎたくゝもなりるゝなとゝうちいひてむとうひゐるもいとあるれは、なゝのゝほひのあるゝのゝと涙ぐましうきこゆ。ひゞりなどすらさきの世のこと、夢ゝ見るゝいとかゝるなるをいとかうあるゝかなのやうゝ、まるゞしかゝぬ心地ゝ、夢ゝみるゝやう清ゝのらい堂ゝみゝれば別當とおぼしき人いでゝ来て、

なくたうみしぞとのゆゝいふゝなどの文字を添へてゆくべし。

たゝてしも、たゝてきといそでも、てゐをそ覆ひがくし。傳寫の誤りゝもや

そこに、さきの生ゝ、この御寺の僧まてなんありし。佛師ゝて、佛をいとおほく作りたてまつりし、功德ゝよりて、ありしすぎうまきりて人と生れたるなり。この、みぐうの東ゝ、おそする丈六の佛を、そこの、作りたりしなり。たくをおしてなくなりゝみしぞと、あないみじ、さそあれゝ、たくおしゝ奉つゝむといくでなくなりゝみぞ、ゝと人をくおしたてまつりてゝ、供養もたてしとみてのち、清水ゝねんぐろゝ、系りつかうまつりましみぞ、さきの世ゝそのみてゝ、佛ねんぐまう

しけんちからよ、おのづからよう、をこがましく見えしこのぞ、見れをかくてどうこもりぬべきぞとのこうなげよ世をおもひいふめるよ、心ぼそさたくぼ。東を、野のたゝるぐとあるよ、ひんがしの山ぎをを、ひえの山よりして、稲荷などいふ山まであらそよ見えをこうり、西を、ならびの岡の松風、いと耳ちこう、心ぼそくゆえて、内をいとぐきのもとまで、田といふものゝ、ひたひきなるす、音など、田舎のこゝちしていとおのしきよ月のあかき夜などをいとおもしろきをながめあるく

らすよ、ちりたりし人ざと遠くなりておとせず。便りよつけて、何事のあるんと、つゝふる人よおどろきて、

おもひいでゝ人こそとゝねゝ山ぎとのまがきのをぎよ、秋風ぞふくといひてやる。十月よなりて、京よりうろふ。母尼よなりておなじ家の内なれど、かゝることよずみをなれてありてをたゞ見れをおとなよちするを、我を、世よもいでまでらをず、かげよかくれたらんやうよて、みゝをを見るも、たのもしげなく、心ぼそくおぼゆるよ、き

らゝめすゆうあるところよ、何となくづれぐよ心ぼそくてあらんようをとめすをこだいのおやを、宮づのへ人を、いとうきことなりと思ひて、すぐゝするを今の世の人をさのみをそをいでたてさても、おのづゝうゝよきたあゝもあり。さてもこゝろみよといふ人々ありて、ちぶゝよいだゝたてゝらる。まづ、一夜まゐる。菊のくゝうすき、八ぢかりよゝうき撥練をうへよ着うゝさをそ紙がうよのみ心をハれてそれを見るより外よ、ゆきかよふるゝちぞくなどだよゝことよなくゝ古代の親どもの、かげだかりまて、月をも花をもみるより外の、事をなき慣ひよゝちいづるほどの心地、あれゝうよもあらず。現ともおぼえで暁よもまかでぬ。さとびゝる心地よをゝなのゝ宮まりたらむ、里ずみよりも、おのうきことも、見聞きて、心も、慰みやせんと、思ふをりゝ、あゝしをいとはゝしたなゝ、悪ゝうるべき事よをそ、あべのめれと思へどいかゞせん。極月よりて、又まゐる。局して、四度を、日にさぶゝふゝくよをそ、時々、よるゝくも、のぼりてゝちぬ人の中よ、うち卧てづゆまど

ろまれず。恥のゝう、物のつゝまゝきまゝよ、思びて
うち泣のゝしつゝ、暁よりを、夜ふゝくまでゝ、ひゝら
してゝらの老い衰へて、ゝれを子としも、頼もし
かゝむかげのやうよ思ひ頼み、向ひゐるゝよ、
恋ゝしゝおぼつゝのなゝくのみ覺ゆ。くるほしいのよ、
よゝなこゝろける心なゝりと、思ひきみをゝ、まめ
くゝしゝ、過すとなゝうだ、さても、育り果てず。まゐ
りそめし所よも、かゝくかき絶りぬゝを、まゝとと
も、おぼゝめゝたゝぬさまよ、人々もつげ、絶えず、
めゝなどする中よも、ゝざとめゝてゝのい人系

らせよと、仰せゝられだ、えさゝず、年ごゝたゝる
よひのゝれて、又時々いでゝたゝて、過ぎゝう方の
やうなゝ、あいなぶのみの心をゝりをゝぶよ、ずべ
きやうもなくて、さすがよ、あい人よひゝれてを
りゝく、さゝ出づるよも、馴れゝる人をゝらよなく、何
事よつけても、ありつきゝがほよ、我をいと、ゝかう
どよ育ゝべきよもあゝず。又ゝたゝなよ、ゝらべ
きおぼえもなく、時々のまゝうどよ、さゝそなゝ
れて、すゝゝなゝやうなれど、ひゝとゝよ、そなゝ一
つを、頼むべきなゝねで、我より劣ゝる人あゝも、羨

まくも、あくぜ。なるべく心易くおぼえてさるべき折ふまみりて、つれづれ慰むべき人と、物語りなどして、愛くきことども、おのづから、折もろき折々も、我身を、かやうなたち交り、いくく人のもみしられむとも、怪うあんべけれど、たゞ、大方の事よのみ、聞きつゝ、過ぐすよ、内の御供よ参りくるを、有明の月、いとあかきよ、ゆゞぬねんごゝす、天照御神を、内よぞ、在しますなるこしかくるをり、よ参りて、をがみ奉らんと思ひて、四月ばかりの、月のあかきよ、いとゆゝしびて参りたれば、まかせの

命婦を、たゞる便りあれば、どこの火のいとほのあなるよ、あくまもまくく、おい神さびてさすがよ、とよう、物などいひみるゝと、人ともおぼえず。神のあらたれ給へるよ、おぼゆ。又のあも、月のいとあかきよ、藤壺のひんがしの戸をおしあけて、さべき人々、物ごゝりして、月をながめるよ、梅壺の女御のぼらせ給ふなる、おとなひいみじう心よく優なるよも、故宮の在しますなるまゝ、うぐ、かやうよのぼらせ給えまし、など、人々、いひもづるゝげよいとあたれなりゝ。

たちやあらまし。誤脱もやあらうん。數本、みな斯くのごとくなれども、言さぶかならず。

天の戸を雲居なごりも、よそよ見て、もの
の跡をくふる月のなに、冬よりて、月なく、雪もふ
らずなごり、星の光りよ、京さすがよ、くまなくさ
え渡りくる夜のかぎり、殿の御かるよさぶらふ
人々と、物語りし、明のしつ、あくれば、たちやあ
らまし。いといつかひなく、まうでつかうまつる
らとなくて、やみまき。十二月廿五日、宮の御佛名
よ、めしあれば、其夜ぐうりと思ひて、寄りぬ。白き
きぬどもよ、濃きかいねりを、みな着て、四十餘人
ぞかり、出でゐくりいでし人のかげよ隠

れて、あるずなかよ、うちほのめいて、曉よそまあ
づ。雪うち散りていみじく恐しくさえ永る、曉方
の月のほのかよ、こき搔練の袖よ、移れるもげよ
濡るくかほなり。道すがら、
年をくれ、夜を明ごさの、月かげの、袖ようつ
れる、猶ぞはつなのき、かう立ちぬとならぬさ
ても宮づかくのかくよも、たち別れ世よまぎれ
くるも、ねぢけずましきおぼえもなきほどを、れ
のづうら、人のやうもおぼしよてなさせ給ふ
やうも、あらまし。親たちも、いと心得ず。ほどもな

なり果てゝぞ。ぞ文字おちつゝず。ひとゝの動詞おちさ

くゝめすゑつゝさりとてその有様の、思ちよきちくゝき勢ひなど、あんべいやうもなく、いとよしなりけり。すゞろ心よりてもゝことの外よ、遣ひぬる様なりゝ。

いくゝ度水の面芹をつみゝゝど、思ひゝことのつゆもうなえぬ、とぞゝり、ひとりごちられて、やみぬ。其後は、何となく、まぎらはしきよ、物語のことも、おちたえ、忘られて、物まめやかなるさまよ、心もなり果てゝぞなどて、多くの年月をいゝづらはて、即ゝ部きゝよ、彩ひをも、物まうでをも、

ゝならべゝ。

せざりけん。此あゝまゝごととても、思ひゝことどもは、せよ、あんべうけることどもなりや。光ゝ源氏ぞゝりの人を、此世よ、おとゝゝけりやを。薫ゝ大将の、宇治よかゝゝす為、絵みべきもなきせなり。あな物ぐゝほゝや。國まて、物詣でを、ゝづうまゝてもたゝかぐゝゝ人のやうなゝんともねんぜゝられず。此頃の、世の人を、十七八ようこそ、経よみ、彩ひもすれぞゝること、愚ひかけられず。からうゝて、思ひよることは、いみゝゝ、やんごとなきかゝゝち、有様、物語よあゝる、光ゝ源氏などやうよ、在

せん人を、年ゝ一度まても、通そゝまうて、浮舟の
女君のやうゝ、山里ゝかくしすゑられて、花、紅葉、
月、雪をながめていと心ぼそげなるめでたうら
ん、御文などを、時々、待ち見などこそせめとぞの
り思ひつゞけあくまもゝごとよも、おぼえけり。親と
なりなぞ、いみじうやんごとなく、我方もなりな
んなど、たゞ、行くゝへなきことを、うち思ひ過すゝ
親からうゝじてたゝのゝ、遠きあづまゝなりて、年
ごろをいつゝしの思ふやうゝ、近き所ゝなりたらば、
まづ、胸あくだろう、かゝづきこゝて、みてらだうて、

海山のけゝきもみせ、それをださるものまて、我
が方よりも、言うもてなゝかゝづきて、見んとこ
そ思ひつれ。我も人も、宿世の、拙なこうりければ、あ
りくて、かくゝ、遠のなる國ゝなりゝたり。幼なこう
し時、東の國ゝ、みてくらだうてだゝ、心地も、いさゝか
あゝければ、それをや、此國ゝ見捨てゝ、まどそんと
すうんと思ふ。人の國の、おそろゝきゝつけても、
我が身、一つならで、安らのなうまゝを、所せう、ひ
き倶ゝていそまほゝき事も、えいそず、せまほゝ
き事も、えせずなどあるぞ、つゝびゝうも、あうなと、

心をくだきしまよ、今たゝまいて、たとなよなりまた
るを、將てくぶりて、つとぶの命も知らず、京の中まで、
さすらへむを、例の事、東の國、田舍人まで成りてま
どをんをいみじかるべし。京とても、たのもしう
ゆくとりてんと思ふ、類親族もなし。さりとても、
づるまなりうる國を、辭しやすべきまもあるねど、
京よりとぶめて、長き別れまて、やみぬべきなり。京
まも、さるべきさまもてなして、止めんとを思
ひよることまもあらずとよるひるなげかる
を、ゆく心地、花紅葉の思ひも、みな忘れて、悲しく

いみじく、思ひなげうるれど、いかゞせん。七月十
三日よりぶる。五日、かねてを見んも、中々成らべ
けれど、うちまもゝ、こぶ。まいて其日を、立ち騒ぎ
て、時成りぬれば、今をとてすぐれを引きあけて、
うち見合せて、涙をほろ〳〵とおとして、やゞて
袖でぬるを見る心ち、目もくれまどひて、やゞの
てふきれぬるまよ、とまる男の、送りして帰るまふ
ところ紙まよ、

思ふこと、心まかなふ身なりせば、秋の別れ
を、涼くたちまとどまりかれたるを、え見や

られず。ことよろづ、時うそうをれがうたる事も、思ひつづけれども、かくもいふべきかも、おぼえぬまゝに、

かけてうそ思ひざりしこの世にて君ぞ別るべしとは

君に別るべしとは、かねてよりけんいとゞ人目も見えず、淋しく心ぼそくうちながめつゝ、つゝがなくと、明暮思ひやる。道の程も、たゞ、そらかよ戀ひしく、心細き事、限りなし。四月ばかりに、うづまさに籠るに、一條より、清

づる道に、男車、うつゝかり、ひきたてゝ、物へ行くに、諸ともに、来べき人、待つなるべし。過ぎて行くに、從身だつものを、おろせて、

花みにゆくと、君をみるうなゐといそせられぬ、かゝるほどの事を、いゝくぬも、びんなしなど、あれど、

ちぐさなる心なりひみ、秋の野のとぞかりいそせて、いき過ぎぬ。七日、侍ふほどもたゞ東路のみ、思ひやられてよりなし。さかくして、そなれて平らのよ、あひ見せ給へとやせど、佛もあれ

と、ゆきいれうせ給ひけんかし。冬よなりて、日暮らし、雨ふりくらいする夜、雲かくる風烈しうおちゝゆきて、空晴れて、月いみじう、あかう成りて、軒近き萩のいみじう風にふきなびかれてくだけまどゝみぬ、いとあはれなれば、

秋をいのる、思ひいづらん、冬ふゆみ、嵐よまどふ、萩のかれ葉を、東より人来たる。神拝といふ日ざして、國の中、ありきしよりおのゝく流れくる野のはるゝとあるよ、森のあるおたうしき所のなみみせてと、そゞ思ひいでゝ、こゝをいづことのいふ

森云々より、向へむの間は、詞おちゝゝるべし。考たゝかふき

と、問へば、こゝのびの森となんやすと答へたりしゝ、ゆよよそくゝられていみじく悲しゝうしのぞ、馬よりおりてそこよふる時なんながめられし。

とゞめおきて、我ごと物や思ひけん、みるよ悲しきこゝのびの森、となむおぼえしと、あるを、みる心地いくぞ更なりぬ。ほうりごとよ、

こゝのびを、聞くよつけても、留めおきし、ちゝぶの山のつらき東路、かうて、つれゞとながむるよなどゝ、物まうでも、せざりけん。毎いみじか

ほうりごとえが、とあらべきこと教科書三の巻四丁よいくらゞ如。

こゝえがゝし。

りし、古代の人まて、初瀬まてあなおそろし、奈良坂まて、人まとられなむ、いかゞせん、石山、関山こえていとおそろし。鞍馬たき、山、みていでん、いとおそろし。や。親登りてゞもかくもとさし、はなちたる、人のやうみゞづらをしがりてゞづのよ、清水よみて義りたり。それまも、例のくせをまことしこのべいことも、思ひやられず。彼岸のほどまて、いみゞしう、騒ゞしう、おそろしきまで、おぼえて、うちまどろみ入りたるよ、御帳の方の、いぬふせぎのうちよ青き織物の衣を着て錦を頭よりかづき、足まもはいさろ、そうの、別當とおぼしきぞ、より来て、ゆくさきのあそれならむもまらず。さも、よしなし事をのみとうちむつかりて、御帳のもよ、入りぬとみても、打驚きても、かくなんかえつるとも、語らず。心まも、思ひとゞめでまこのでぬ。母、一尺の、鏡をいさせて、えみて、ゑらせぬ、かそうよとて、そうをいだしてゞ、初瀬よ詣でさすめり。三日、侍ひて、此人の、あゞでうんさまいまよ見せ給へなゞ、いひて、まうでさするなめり。其程を精進せさす。この僧、帰りて、夢をだよりゞでまうでなん

まことしかべいえまことしかるべきを或ひえ約め或ひを音便よりていひなしたるなり。

申すべきこの下れぞ。文字を省きこゝろなり。べきまで、切れゝるまえあらず。

ぞ、布意なきこと、いあぐ帰りてもやすべきと、いみづう、ぬうづき行ひて、寝こゝろしのぐ、沖帳のかさより、いみづうけだたう、清げよ在する女の、兼そしうさうぞき給くるぞ奉りし鏡をひきさげて、此鏡まえ、文やそくうるうしと、同ひ孫くだ、かしまりて、文もさぶらそざりき。此鏡をなんまれと侍りしと、蓋く奉れぞ、あやしうける事ぞな。文そうぐきものをとて、此鏡をこなるよ移れる影をを見よ。これ見れぞ、あそれよ悲しきぞとてさめぐと泣き給ふを見れぞ、ふしまろび泣きなげ

神仏よかえなどのかえハ反辞よえあしず。神仏よかあら

きたる新移れり。此影をみれぞ、いみづう悲しな。
られ見よとていまかゝる方よ、移れる影をみせ給へぞ、沖廉ども青やよ、未帳おしぜたる、下より、いろくのきぬらぼれいでて、梅、櫻、咲きこゝろよ、鶯、こづゝひ鳴きたるをみせてこれをかるも、嬉しなど、宮ふとなむ、みえしとかゝるなり。いろよ見えけるぞとぶよ、耳もとぐめず。物もかなきこゝろよも、つねよ、天照る沖神を、念じ申せといふ人あり。いづくよ在しますぞ、神仏ようなどさをいへど、やうく思ひ出かれて、人よらへぞ、神よ在しま

んするもなどいふべきを斯くも略せしなるべし。此たぐひぐるの書なり。

す。伊勢よ在ります。紀伊國よ、きのくさうとゃすを、此神なり。さて、内侍所よすべら神となん、在りますといふ。伊勢の國までを、思ひかくべきよも、あらぎなり。内侍所よも、いかでうを、ゆ、をがみまらん。空の光を、ねもじゃすべきよこそをなど、うきてゐぼゆ。たぞくなる人、尼よ成りて、すがく院よ入りぬるよ冬頃、

なみざさへ、ふりをへてぞ、おもひやる、あらし吹くらん、ふゆのやまざと。

かくし

ゆけて、さぶ心のほどの、見ゆるこなる、ものかげをぐらき、夏のちげりを、あづまよりぶらし、親からうじて、登りて、西山なる所よ、おちつきられど、そこよ、みな渡りて、見るよ、いみじう嬉しきよ月のあかき夜、ひと夜、物がたりなどして、

かくるゆも、有りけるものをかぎりとて君よ別れし、秋をいうのぞ、といひられだ、いみじくなきて、

思ふこと、かなはずなぞと、いとひらし、命のほども、今ぞ嬉しきぞらしぞ、別れのかどでと、いひ

知らせ〜ほどの悲〜さよりも、手らのみ待ちつけ〜る、嬉〜さも、かぎりなけれど、人のうへまでも、尼〜よ、老い惚くて、せよ、いでまづらひ〜を、都のうちとも見えぬ、所のさまなり。ありもつかずいみじう物語がけれども、いつ〜のと、思ひ事なれば、物語もとあて、見せよ〜と、母をせむれば、三条殿の宮よ、ものぐ〜なる人の、衛門の命婦とて、侍らひける、訪ねて、文やりぬれば、孫ら〜が、りて、悦びて、庭前のを、おろ〜たるとて、見ざと、愛たきさう〜ども、硯の箱のふたよいれて、おこせ

侍らひけるのみなもとを文字のあるべきを、省けり。

おろ〜たるのみなもとを文字を省けるなり。

たり。嬉〜いみじくて、夜晝ごれを見るようう、ちちじめ、まさくも尼まほ〜きよ、ありもつかぬ、都のほとりよ、誰うを、物がたりもとめ、見する人のあらん。継母なり〜人をみやづく〜せ〜ぞ、やりしなれば、思ひ〜よあらぬことどもなどあり、て、世の中恨み〜げまて、外よ渡るとて、五つばかりなる、ちごどもなど〜して、あそれなりつる、心のほどなん、忘れん世あるまじきなど、いひて、梅の木の、つま近くて、いとおほきなるを、ごれぞ、花の咲うん折を、来んよといひおきて、渡りぬるを、心

の内よ、窓〳〵、あそれなりと思ひつゝ、思びねを
のみ泣きて、其年も帰りぬ。いつ〳〵この、梅咲このな
んぞ。むと有り〳〵をさやあると、目をかけて待ち
渡るよ、花も、みな咲きぬれど、音もせず。思ひて
びて、花ををりてやる。
たのめ〳〵を、誰や待つべき、嘉枝れ〳〵、梅を
も春を、忘れざりけりといひやりたれば、あそれ
なら事どもかきて、
なほたのめ、梅の立枝を、契りおきぬ、思ひの
外の、人もらふなり。其春、世の中、いみじう騒ぐ

うて、まつざとのつゝうの月影、あそれよそ〳〵め
のとも、三月朔日よなく〳〵なりぬ。ぜんかゝなく、思
ひなげくよ、物がゝりのゆか〳〵さも、おぼえずな
りぬ。いみじく泣き暮らして、たいぶ〳〵れば、
夕日の、いとはなやかのよさ〳〵たるよ、櫻の花殘り
なく散りみだる。
散る花も、又らん春を、みもやせん、やどて別
れし、人ぞ戀〳〵きぞ。まる周けど侍従の大納言の
御むすめなくなり泣ひぬなり。殿の中將の、おぼ
しなげくなるさま、我ぞ物の悲〳〵き、をりなれど、

いみじくあさましなりとゆく。のぼりつきたりし時、ふれば、本よせよとて、此姫君の、沖てをとらせたりしを、小夜ふけて、ねぶめざりせば、などかきて、鳥部山、谷よりけぶりの、もえたらば、はかなくゝんえし、我とちらなむ、といひしらず、おもしげよ、めでたく書きはくるを、かくていとゞ、涙をそへ、増る。かくのみ、思ひくんじたるを、心も慰めんと、心ぐるしがりて、母、物語など求めて、見せはふよ、げよ、あのづから慰みはく。紫のゆゑのりを見て、つぎの見まほしくおぼゆれど、人かたらひなども、え

せずぞさられどいまゞ、都別れぬほどまでえ見つけずいみじく心もとなくゆゝしくおぼゆるまゝよ、この源氏物語一の巻よりしてみな見せ給へと、心の中よ祈る。親の、うづまさよ筋ひはくるよも、異事なく、世事をもしていでんまでよ、此物語見えそめむと思へど、見えずいとゞ惜しく思ひなげかるゝよ、叔母なる人の、田舎よりのぼりたる所よ、渡いたれば、いとうれしくおひたちなりけりなどあそれがり騒ぐ。ゆかりて帰るよ、何をよ奉らん、まめくしきものえまぎなかりなん。ゆかしく

し給ふならものを、奉らんとて、源氏の五十餘巻、櫃よりなどぞ、ぞの中将、とほぎみ、ぜり川ちう、あさうづなどいふ物語ども、一袋、とり入れて、えて帰る心地の、嬉しさぞいみじきやうもなく、とづのよ見つ、心もえず、心もとなく思ふ、源氏を、一の巻より、人もまじらず、木丁のうちよ、折ちふて、ひきいでつゝ、ゐる心地、后の位も、何よかをせむ。晝は、日暮らし、ゆるも、目のさめるかぎり、火を近くとも、て、是をゐるより外の事なければ、おのづから、名なども、そらよ覚え浮ぶを、いみじき事よ思ふよ、夢よ、いと清げなる僧の、黄なる地の袈裟着るゞ来て、法花経五巻を、とく習へといふと、見れど、人よも語らず。おもてもとも思ひかけず。物がゝりの事をのみ心よもあて、我を、此頃ゐるきぞうし。盛りよなるに、かゝるもかぎりなくよく、髪も、いとみじく長くなりなん。ひよる源氏の夕顔、宇治の大将の、うき舟の、女君のやうよゐて、あらあと、思ひける心まづいとゝかなくあさまし。五月つゐたち頃、つま近き花橘の、いと白く散りゐるを、なゞめて、

有りつるとも、有りつなどとあるしを、誤写せしなるべし。つるよりどよかくらざるも、つふも更なれども、だとくか

時なるぞ、ふる雪のみとぞながめまし、花橘の、かをるさりせば。是橘といひし、山の麓よりが、り流るるるし、木のやうよ、茂れる所なれど、十月ばかりの紅葉、四方の山邊よりもけよいみじく、おもしろく、錦をひけるやうなるよ、外よりまるる人の、今来つる道よ、紅葉の、いとおもしろき所の有りつるといふよ、ふと、

いづこまも、おとらじものを、我が宿の、よをあきはつる、けしきばかりを、物語りの事をひるを、日暮らし、思ひつづけよるも、目のさめる

くとしても、泪さらぬこちせらる。

かぎりを、是をのみ、心よかけるよ、夢よりはゆるやう、此ごろ、皇太后宮の、一品の宮の、御れうよ、六角堂よ、やり水をなんつくるといふ人あるを、そをいとのよと聞くに、天照る御神を、ねんじまぜと、いふと見て、人まも語らず。何とも思はでやみぬる、いといかひなし。春毎よ、此一品宮をなげめ、やりつ、

咲くとまち、散りぬとなげく、春をたぐ、我が宿がほよ、花をみるこなな。三月つごもりがた、つちいみよ、人のもとよ、流るるよ、撫の盛りよ、おも

しろく、今まで、寄らぬも、あり。かへりて、又の日、
あかぎりし、やどの樹を、春くれて、寄りがさ
よしもひとり見しるなといひよやる。花の咲き
寄るをりごとよ、乳母、なく成りし、おぢかしとの
みあそれなるよ、同じをり、なく成り給ひし、侍従
大納言の、佛むすめの、書を見つゝ、すぐろよ、あを
れなるよ、五月ばかり、夜ふくるまで、物がたりを
よみて、起きゐられだに、来つらん方も、見えぬよ、
猫の、いと長うなりぬるを、驚きてゐられだいみじ
うおのしげなる、猫ありぃ。いづくより、来つる猫ぞ

と、ゐるよ、姉なる人、あながち。人口がのすな。いと
おのしげなる、猫なりかぞらんとあるよいみじう、
人馴れつかゝそらよ、おちふしたり。寄ぬる人
やをと、是をかくしてかふよすべて下司のあらり
ゐも、よらずぃつと、前よのみありて、ものもきたな
げなるを、外ざまよ、顔をむけてくゝず。姉おとゝ
の中よ、つと、まもられて、おのしがりらうがる
ほどよ、姉の、なやむ事あるよ、物騒がしくて、此猫
を、北にもてよのみ、あらせて、呼びねだかしがる
しく、なきのしれども、なほさるまてらそをと、

思ひて、あるよ、つづらふ姉、驚きて、いづら、猫を、こちゝあてゝとあるを、なゞ〳〵問へば、夢よ、此猫の、側らよ来て、おのれを、侍従の大納言殿の、御むすめのかゝなりゝるなり。さらべきえんの、いさゝか有りてゝらの中の君の、すゞろよあそれと、思ひ出で給へば、たゞちゝ〳〵、ゝらよ有るを、出頭下司の中よありて、いみゞうつくびゝき事と、いひていみゞう泣くさまを、あてよ、おのゝしげなる人と、たゝえて、おち驚きゝれば、此猫の聲まて有りつるぞ、いみゞくあそれなるなりとかゝり給ふを、つくよ、

いみゞくあそれなり。甚後を、此猫を、北面よも出ださず。思ひかゝづくゝたゞ、ひとり居るる所よ、此猫ぞ、向ひ居るれば、かいなでつゝ、侍従大納言の、姫君の、立すらな。大納言殿よ、ゝゝ世奉らばやと、いひかゝれば、顔をうちまもりつゝ、なゞうなく、も心の思ひなゝ目のうちつけよ、例の猫よそ、あらず、聞きゝりがほよ、あそれなり。世の中よ、長恨歌といふ文を、物がゝりよかきてある所、あんなりと聞くよ、いみゞくゆかしけれど、えいひよらぬよ、さらべき便りを尋ねて、七月七日、いひやる。

ちぎりけん、むとの、今日の、ゆかしさよ、あ、
まのかぐなみ、おちいづるこなる。

立ちいづる、天の河邊のゆかしさよ、常をゆゝしきことも忘れぬ。その、十三日の夜の月いみじくくまなくあかきよ皆人も、寢ぬる夜中ばかりよ、樣よしでゐて、姉なる人、空をつくづくとながめて、只今、ゆくへなく、飛びうせなば、いかで思ふべきと、問ふよ、なまねたましと思ふるけしきを見て、異事よいひなして、笑ひなどしてきけば、

異ふべきの下、そゝぐ文字のあるべきを省けり。

かゝるなる所よ、さきおふ車、とまりて、荻の葉くゝと、呼びすれど、答へざなり。呼びつづらひて、笛をいとおもしろく吹きすまして、すぎぬなり。

笛の音の、たゞ秋風と、きこゆるよなど、荻の葉の、そよとゝくぬといひつれば、げよとて、

荻の葉の、そよふるまでも、吹きよらでだに、過ぎぬる、笛の音ぞうき。かやうよ、あくるまで、ながめあひて、夜明けてぞ、みな人寢ぬる。そのかへる年、四月の夜中ばかりよ、火の事ありて、犬納言殿の姫君と、思ひかしづきし、猫も焼けぬ。犬納

言殿の姫君と、呼びしみで、聞きたりがほなきて、あゆみ来などせしてこなりしに人もめづらしのよ、あそれなることなり。大納言よりさむなどありし程よ、いみじう、あそれよ口惜しくおぼゆ。ひろぐと、物深き、深山のやうにありながら、花紅葉のをりも、四方の山邊も、何ならぬを、見なりひろるよ、たゞしくなく、せばき所の庭の、ほどもなく、木などもなきよ、いと心うきよ、匂ひなる所よ、梅こうぐいなど、咲きみだれて、風よつけてかゝえくるよ、つけても、住み馴れし古郷がぎり

風を多よしめて、風の多よしみての、誤りよをあらぬう。志めてといへむや句の意ひしきを他動の語よかへでも、自他の語脉とのひがゝ。此日記、語脱多けれどうち思ふ〳〵まゝをなん。

なく思ひ出でらる。

旬ひくら、隣の風をみよしめてありし軒端の、梅ぞ意ひしき、其五月の朔日よ、婢なる人、子産みて、なくなりぬ。よそその事だよ、幼くより、いみしくあそれと、思ひ渡るよまして、いそん方なく、あそれ悲しと、思ひなげかる。母などをみなくなくなれ悲しと、思ひなげかる。母などをみなくなくなりゝる方よ、あるよかゝみよさまりたる幼き人々を、左右よふせゝるよ、荒れたる板屋のひまより、月のもり来て、ちごの顔よあゝらるゝぞ、いとゆしくおぼゆれど、袖うちおほひて、今ひとりをも、

かゝりごとゝ、かくゝとあるべき事、上よいつるゞめし。

かきよせて、思ひぞいみじきや。其程過ぎてもぞ
くなる人のもとより、昔の人の、必ず求めて、おこ
せよと、有りしあだ、もとめしよ、其をりをええ出
でず成りぬるを、今しも、人の、おこせたるぞ、あそ
れよ思しき事とて、かぞね尋ぬる宮といふ、物
語をおこせたり。まことにぞ、あそれなるやゝ過り
事よ、
埋もれぬかぞねを何よ、尋ねけん、昔のトよ
そ、分こそ成りぬれ、乳母なりしく人、今も、何よつけ
てゐなどなくゝもとありける所よ、帰り渡るよ、

たらしえたりきたらでそてにをそ誤ひがし。例の誤寫

故郷よ、かくこそ人を、帰りけれ、あそれいの
なる、別れなりけん、昔のかゝみよを、いかでとな
ん思ふ、などかきて、硯の水のうほれで、みなとぢ
られて、とゞめつと、いひしるよ、
かき流す、涙をつらくよ、閉ぢてけり、何を忘
れぬ、かゝみとの見ん、といひやりしる、返り事よ、
なぐさむる、かゝも渚の、濱ゝ島、何ゐうきせ
よ、跡もとゞめむ。此乳母、墓所見てなくゝかくり
たりし。
登りけむ、野邊を烟も、なかりけり、いづこを

なるべし。

そこのと、尋ねてみるに、是を聞きて継母成りし人、
そこそこかと、知りて行くのねど、先ず立つ、涙ぞ
道のまろべなりけり、かぞね尋ぬる宮、たづこせる
りしく、
信み別れぬ、野邊の笹原、あとをかもなく
いつよ、霧ねるびけん、是をたてせうとたそのね、
あくりよいきたりしるぞ、
見しまくよ、燃えし烟を、つきまをいつぐ
霧ねし野べの笹そそ、雪の日を経て降る頃吉野
山よすも尼君を、思ひやる。

かくりごとも、上よいくるがし。

雲ふりてまれの人目も絶えぬらん吉野の
山の、峯のかけ道、かくる年、正月のつのさめしよ、
親のよろこびすべき事ありしよ、かひなき、つと
めて、同じ心よ、思ふべき人の、許より、さうとも、と、
思ひつ、あくるを待ちみる心もとなきなどいひ
て、
明くるまつ、鐘の聲うも夢さめて、秋の百夜
の、心地せーうなといひくる、返り事よ、
あかつきを、何よまちけん、思ふ事、なるとも
きかぬかねの音ゆゑ、四月つごもり、がくさうべ

きゆゑありて、東山なる所へ、移ろふ道のほど、田の苗代水、まかせたるも、植うるも、何となく青みわかしく見え渡りたる山の、かげくらう、ま近く見えて、心ぼそくぞあはれなる夕暮、水鶏のみしばく鳴く、

たゝくとも、誰れか水鶏のくれぬるに、山路をふかく、尋ねてぞ来ん、霊山近き所なれば、まうでくるをがみ奉るに、いとくるしければ、山寺なる石井によりて、手に結びつゝのみて、此水のあかずおぼゆるなど、いふ人のあるに、

奥山の、石間の水を結びあげて、あかぬものとぞ今のみやたるゝといひふれど、水のむ人、

山の井の、雫に濁る水よりも、こそなほあかぬ、こゝちこそすれ、帰りて夕はけざやかにさしたるに、都のかたも、残りなくみやらるゝに、此雫に濁る人ぞ、京に帰るとて、心ぐるしげに思ひて、まうでつとめて、

山の端に、入日の影ぞいりぬる、心ぼそくぞながめやらまし、念佛する僧の、暁にぬかづく音の尊く聞こゆれど、戸をおしあけたれば、ほの

ぐとゆけゆく、ゆきそこ晴き、梢ども、霧深うて、花、紅葉の盛りよりも、何となく哀りまさるれど、空のけしき、くもらそしくれたるのしきよ、郭公さへいと近き梢よあまさ度ないふり。

誰れよみせ淫れよきかせん、山里の、曉を、ちかくふる音も、はつごもりの日、谷のかくなる木の上よ、郭公かしがましくないたり。

都よそ、待ふんものを、子規、げふひねもすよなきくらすな、などのみながめつゝ、もちとも、ある人、只今、京よも、聞きふん人あらんや。

かくてながむるんと、思ひたつる人あらんや、などいひて、

山ふかく、たれの思ひそ、ねぐすべき、月みる人を、多のらめどもといくべ、

深き夜よ、月見のをりそ、ちらねども、まづ山里ぞ思ひやらる、曉よなりやたぬらんと、思ふほどよ、山の方より、人あまくくる音す。驚きてみやりふれば、鹿の、えんのもとまで来て、うちないたる、近うてなつかしからぬ、もの〳〵聲なり。

秋の夜の妻こひかぬる、鹿のねを、遠山よりそ、

きくべかりけれ、ちりうる人の、近きほどよ、来て
帰りぬと、聞くよ、
まゞ人目、ちらぬ山べの、松風も、音してかく
る、物とこそきけ、八月よなりて、廿餘日の暁方の
月いみじくあそれよ、山の方をぞ、ぐらく、瀧の音
ども、似る物なくのみ、なぐめられて、
思ひたる、人よみせぞや、山里の、秋の夜深き、
有明の月、東よ帰り出づるよ、ちゝろ、時を水ぞ
かりみえし田ども、みな、苅りたてけり。
苗代の、水うげたる、かりたち

るまでなどゞ居しよけり、十月つごもりがたよ、あ
うらさまよ来て、見れば、ぐぐうちげりうし、木
の葉ども、残りなく、散りみぶれて、いみじくあそ
れげよ、見え渡りて、必絶よげよさゝらぎ流れし
水も、木の葉よ埋まれて、涙ぞうりみゆ。
ちさくよ、すみたえよけり、木葉ちる、嵐の山
の、ゝろぼそさよ、そこなる花よ、春まで命あら
で、必ず来む。花盛りをまちつけよ、などいひて、帰
りまして、年帰りて、三月十餘日よなるまで、音も
せねど、

契りおきし、花のさかりを、つげぬうな春や
まぶ来ぬ、花や白ちぬ、旅なる所よ来て、月の頃、竹
のもと近くて、風の音よ、目のみさめて、うちとけ
て、ねられぬ頃、

竹の葉の、そよぐ夜毎よ、ねざめして、何とも
なきよ、物ぞ悲しき、秋の頃、そこを立ちて、外へ移
ろひて、そのあるじよ、

いづこにも、嵐のあそれを、ものれどを、浅茅
ぶ原の、秋ぞこひしき、継母なりし人、くぶりし國
の名を、宮ぶもいそらく、よ、こと人通そして、後も

なほ、其名をいそるとき、きて、杉やの今をあらな
きよ、いひよやらんと、有るよ、

あさくらや、今を雲居よ、聞く物をなほき
のまろぶ、名のりをぞする、かやうよ、そこをそ、と
なき事を思ひつづく。ものれく、ちつまこのでし
を思ひいでけれど、

月もなく、花もみぎりし、冬の夜の、心よちみ
て、こひしきやなぞ、ものれもさ思ふ事なるを、同じ
心なるも、おのしうて、

さえし夜の、水を袖よまさとけて、冬の夜な

ぶら、音をうてたなけ、所前よふ〜てきけど、池の
鳥どものよもすがら、聲々さぶき騒く、音のする
よ、因もさめて、
　ひぐらしとぞ、あのうきねよ、あう〜つゝ上毛
の嵐をたちひびぶなる、とひとりぶちたるを、か
ゝちよふ〜絵へる人、涙きつけて、
　まゝて思へ、あのかりねの、ほどだよぞ、うそげ
の霜を、拂ひびけ、かゝちふ人どち、局のへぶ
てなる、やり戸をあけあそせて、物語などしくち
すは、又がうちふ人の、うへよものし給ふを、度々よ

びおろすよ、せちよとあらでいとのむとあるよ、
枯れゝる薄の、あるよつけて、
　冬ゐれの、ものゝふ小簿、袖たゆみ、まねきもよ
せど、風よまのせん、上達部、殿上人などよ、對面す
る人も、定まりゝるやうなれど、うひくしき里人
をおりなゝをぶよ、ちらるべきよもあらぬよ、十
月ついちぶろの、いとくらき夜、ふぶん、徒よ、琴
よき人々よ、むほどなりとて、そなる近き戸口よ、
二人ぢのうたち如でゝ、聞きつゝ物ぶうして、
よりふ〜てあるよ、寄りゝる人のあるを、にげ入

くちをしからざるなりといふべきを省けるなり。

りて、屬なる人々、呼びあげなどせんも、みぐるし。さぞれたぐをうからこそ、かくてだよといふ。いま一人のあれど、側らまで聞き居るまおとなしく、まづやるなるけきひまて、物などいふ。くちをしからざなり。いま一人をなどとひて、世のつねの、うちつけのけきうびてなどもいひなきず。世の中のあそれなることどもなど、細やかのいひをでいさぷがまきびしう、ひきいるかをふしぐありて、我も人も、蒼くなどするをまぐちらぬ人の、ありけるなど、めづらしがりて、とみまた

つぐもあらぬほど、星の光りだまよ見えず、くらきまうちしぐれつゝ、木の葉まかるる音の、杉のしきを中々まえんまおつき夜のな月のくまなくあかるんもたなくまぐゆうりぬべうりけり。春秋の事などいひて、時まちたぐひ見る毎まを妻霞おもしろく、空もものどのまかすみ、月のおもてもいとあうもあらず、遠うなるくやうまみえたるまは、琵琶のふのうてう、ゆるらのまひきならしるいといみぐく、聞こゆるまふ、秋まなりて、月いみしうあぐきまを、雲を霧渡り

ふれど、ゑよとるぞかり、さやゝすみ渡りふる
よ、風の音、虫の聲、とりあつめふる、心ちするみ箏
の琴かきならされぐる、平調の、吹きすまされた
るを、何の事とおぼゆゝし。又さゝのと思へば、冬の
夜の、ゑさえさゝえ渡り、いみじきよ、雪の降り積り、
光りあひたるよ、ひらりきの、ゑなきいでふる
を、事秋もみな忘れぬゝといひつゞけて、いづ
れまこの、神心とゞまるとゝふよ、秋の夜よ、心をよ
せて、ふゝえ渡ふをさのみ同じさまをいそゞ
とて、

なゝりなむ、なりなとあゝしを傳写の誤りまて、なゝ宋、ひとつ書き添へふるゝをあらぬゝ。

あさみどり、花もひとつよ、かすみつゝ、おぼ
ろよ見ゆる、春のよの月どころゝゝれだ遠すく、
うちずんじて、さゝを、秋の夜をおぼゝすてつるな
なりなな。
今宵より、後の命の、もゝもあらじ、さゝを春の
夜をかゝるみと思ふゝん、といふよ、秋よ心よせゝゝ
人、
人をみな、事よ心を、よせつめり、見れのみや
見ん、秋のよの月とあるよ、いみじう興じ思ひ
づらひける、けゝきまて、もろこゝなどよも、昔よ

あづのめれは、あらべかるめれを省きしなり。

り、春秋のさだめは、えたち侍らざなるを、うのかう、おぼしめしの世ひけん、御心ども、思ふよゆ恋侍らんこそ。ひとの心のなびき、そのをりのあそれとも、たのしとも、思ふ事のある時、やがて、そのをりの、そのけしきも、月も花も、心よそめらるべしを、知らせ侍ひけんことの、ふそ、あづのめれ。春秋を、しなむいみじう承るをりまほしき。冬の夜の月を、昔より、すさまじきものの例よ、ひとりして侍りけるよ、まさいと寒くなどして、ことよみられざりしを、齋宮の御裳着の勅使まて、くぶりしよ、暁

さだめきこえさるべきを省きしなり。

よのぼらむとて、日頃、ふりつみたる雪よ、月のいとあかきよ、旅の空とさへ、思へば、心ぼそくおぼゆるよ、まかりゆしよ、宗りたれば、よの所よも、似ず。思ひなしさへ、おそろしきよ、さべきあまめして、圓融院の御世より、ふうふうけるひの、いとよいみじく、神さびたるあいたる、けそひの、いとよしふるく、昔ふることも、いひいでうち泣きなどして、よう調べたる、琵琶の御ことをさしいでられうしをらの世の事とも、おぼえず。夜の明けなんもをしう、京のらとも思ひたえぬぞうお

ぼえ侍りしよりなむ、冬の夜の、雪ふれる夜を思ひ出らるれて、火桶などをいぶきても、ゐず、いで居てなん、思ひられ侍る。おまへたちも、ゐず、さおぼすゆゑ、侍らむかし。さらぬ今宵ようをぐらき晴の夜の、おぼつかなうちせんを、又、心よ出み侍りなんかし。齋宮の雪の夜よ、おとるべき心ちもせず、などいひて、別れ、し後を、誰れと出られじと思ひしを、又の年の八月よ、内へいらせ給ふよ、夜もすがら、殿上まで所遊びありけるよ、らの人のさぶらひけるも、出らず、その夜を、出もよあかして細殿のやり戸を、おし、あけて見いぶしたれば、曉方の月の、あるのなきのよおぼつきを見るよ、靴の音きこえて、讀經などする人も、有り。讀經の人を、このやり戸口よ、立ちとまりてものなどいふよ、巻へたれば、ふと思ひ出で、時雨の夜なれば、戸時忘れず、こひしく侍れといふよ、こと長うふで

きほどならねば、

何さまで思ひ出でけん、等閑の、木の葉よかけし、時雨だうりを、とゞまいひやらぬを、人々、又来あくで、やがて、すぐりいりてその夜さうまかで

みゝこのゝ、ゐろゝともなりし人、尋ねて、うく〳〵きたりしなども、浅ましぞきく。ありし時雨の、やうならんよ、いとのゝ、琵琶の音の、おぼゆるこゝぢり、ひきて聞このせんとなん、あるときくよゆう〳〵て、我もさるべきをりを待つよ、更よなり。春ごろ、のどやかなる夕つかふ、ふりたなりと聞きてその和もろともなり〳〵人とゐぞりいづるよ、とよ人々まゐりうちみも、例の人々あれど、いでさいていうぬ。あの人もさや思ひけん。ちあやうなる夕暮を、知りをりて、ふりたりけるよ、駿ぐ〳〵かりけれ

だ、まこのづめり。

かゝま見て、なるとの浦よ、らぶれ出づる、心をえきや、磯のあま人どもゝりまてやみよけり。あの人ぐらも、いとすくよのよ、世のつねならぬ人よてその人をかの人をなども、尋ねとそで過きぬ。今を昔のよゝなゝ心もくやゝかりけりとのみ、思ひをりをて、親のものへゐて、ゝ思ひいでらられど、今でやみゝもゝもどこのゝ思ひいでらられど、今をひとくよゆくなる勢ひよりて、こ葉の人をも、思ふさまよかゝづきおほゝたて、ゐぶ方も、

みくらの山よ、積み餘るだこのりまて、後の世まで
の、事をも思そんと、思ひたゝげみて、霜月の廿餘日、
石山よまゐる。雪うちふりつゝ、道のほどさへ、れ
うきよ、逢坂の関を見るよも、昔越えしも、冬ぞ
かゝと、思ひいでらるゝよ、そのほどゝも、いとあ
らう吹いたり。

逢坂の、関の山風吹く聲も、昔聞きしよりかそ
らざりけり。関寺のいしのめしう造られたるを見
るよもそのをり、あらづくりの、沖瀬だこり、みら
れて、年月の過ぎよけるも、

ぐゝ絵つくれ、ぐゝ絵つくをといふべき、そのまを者けり。

いとあそれなり。おなじ山の濱のほどなど見しるも、
変らずぞ。ぐれかゝるほどよ、まうでつき、ゆやよれ
りて、沖堂よのぼるよ、人参もせず。山風おそろし
うおぼえて、行ひさして、打まどろみたる夢よ、中
堂より、沖かう絵をりぬどく、かゝこへつげよと、
いふ人、あるよ、うち驚きたれど、夢なりけりと思
ふよ、よき事なりんこゝと思ひて、行ひあうず。ま
その日も、いみじく雪ふりあれて、宮よかゝらひ
聞こゆる人の、ぐゝ絵くると、物がゝりして、心ぼ
そさを感む。三日さぶらひて、まこのでぬ。そのかく

る年の、十月廿五日、大嘗會、御禊とのゝ志るよ、初瀬の精進始めて、その日、京を出づるよ、さるべき人々、一代よ、一度の見物よて、田舎世界の人ぶよ、みるものを、月日おほかり。そのほしも、京をふり出でゝ、いのむ、いとゝ、こゝとのくるほゝく、なぶれての物語ともなりぬべき事やなど、ばらからなる人をいひはらだてどもの、親なる人をいゐよもく、心よこそあらめとていふよ、志ゝのひていぶ〳〵たつる心ぞくも、あそれなりともよ行く〳〵人々もいとゝいみじく、物ゆゝしげなるをい

とほしけれど、もの見て、何よのそせん。かゝるをりよ、まうでん志ざしをさりとも、おぼ〳〵なん。必ず、佛の御ちゝをみんと、思ひ立ちてその曉、京をいづるよ、二条の大路をわ〳〵渡りていくよ、さよよみあゝしもうせ、ともの人々、淨衣姿なるを、そこら、さゞきどもよ、移るとて、いきちがふ馬も車もかち人も、あれだ、なぞ、こゝとやすのらず、いひ驚き、あざみ笑ひ、あざけるものども、あり。良頼の、兵衛のうみと申し〳〵人の家のまへを、すぐれば、それ、さゞきへ渡りなるべし。門ひろうれ

しあけて、人々たてるぞあれど、物まうで人なめりな。月はたもこそ世よ多のれと、数ふ中よ、いつなる心ある人よりの、一時ぞ目をこやして、何よかたせん。つみ〳〵おぼしくらして、佛の御徳必ずん給ふべき、人よこそあめれ。ずーなーこし。物みで、のうこそ思ひたつべかりけれと、まめやかのよいふ人ひとりぞあるみちげんそうならぬさきよと、夜深うなでしうぞ、立ちおくれる、人々も、待ちいとおそろしう、深き霧をも、すこしもけんとて、法性寺の大門よたちとまりたるよ、田舎よ

り、物見よのぼる、ものども、水の流るゝやうよぞ見ゆるや。すべて、道もさりあへず。物の心もりげもなき、あやしのうちもそぐまで、ひきよきて、行き過ぐるを車を驚きあざみたること、かぎりなし。是等をみるよ、げよいのよ出でたちし、道なりともおぼゆれど、ひくぶるよ、佛をねんじ奉りてうぢのうちよ、いきつきぬ。そこよも、狩しもらなさざまよ、渡りするものども、立ちこみられで、船の、うぢとりたる男ども、舟をまつ、人の数ならぬよ、心おごりしるけしきよて、油をかいまくり

て、新しあて、竿よおろしかゝりてとみよ、舟もよせず。うそぶいて、みまそしいといみじう、すみさるさまなり。むごよえ渡らで、つゝぐとみるよ、紫の物がゝりよ、うぢの宮の、むすめどもの、事あるをいうなる所なれど、そこよりも、住ませたるならむと、ゆのゝ思ひ所ぞおし。げよ、おうしきの所哉と、思ひつゝ、からうじて、渡りて、殿のさぶらう所の、うち殿をいりてみるよも、うきふねの女君の、かゝる所よや、ありけんなどまづ思ひもでらる。夜ふゝもでゝ、人々、こうじてやひろうちと云ふ所よ、とゞまりて、物くひなどするほどよりも、供なるものどもがうみやうのくりこまやうの、山よそ、あらずやはも、くれぬるよ、なりぬめり。ぬしゝち、調度とりおそうせよやといふを、いと物おそろしうきゝ。その山、越えそゝ、よくゝの池のほとりへいきつきたるほど、日は、山の端よりかゝりよりぬ。今そ、やどとれとて、人々あゞれて、やど求むる所、もゝさまて、いとあやしげなる下司の、小家なんあると、いふよいでそ、せんとて、そこよ宿りぬ。みな人々、京よまこうぬとて、あや

ねくらると思ひてね、ねくらこと思ひてこつべきことのみ字を省けるなり。

一の男、ふるうぞ居たる、その夜もいもねず。此男、いでいうしありくを、奥のかたなる、女どもなどかくしありうるぞと、どふなれば、いなや、心もちらぬ人をやどしありて、かまそしもひきぬるれなぞ、このようすべきぞと、思ひて、えねでまそうありくぞ。しとねるると思ひていふきくよいと、むくくしくをこの。つとめてそこをたちて、東大寺よりて、をごみなる。いそのかみも、まことよふりよける事、思ひやられて、むげよあれそよけり。その夜、山のべといふ所の、寺よりやどりて、

いと苦しけれど、経すらしよみまりて、おやすみたる夢よいみじくやむごとなくきよらなる女の、居そするよまみりたれど、風いみじう吹くぞ。つけてうちゐるみて、何しよねそしつるぞと、どひ侍くだいのでうそ、第ちぎらんと申せどそこを、うちよらそあらんとすれば、ようせの命婦をこそ、よくかくらそあと、宣ふと思ひて、嬉しくたのもしくて、いよいよねんじまりて、初瀬川などうち過ぎてそのあ、御寺よまうでつきぬ。ちらくなどしてのぼる。三日さぶらひて、暁よまうでむとてう

ちねぶりたるよ、よさうみぐうの方より、すゑ稲
荷のようたまえる、もるしの杉よりとて、物をなげい
づるやうよ、するよ、うち驚きたれど、夢なりけり。
曉よぶかく出でゝ、えとまらねど、ならぐるのこ
なくなる気を、尋ねてやどりぬ。そもいみじげな
る小家なり。こゝに、げしきある所なめり。ゆめい
ぬな、れうのいのことあらんよ、あなかしこ、おび
え驚ぶせ給ふな。いきもせで、ふさせ給へと云ふ
をきくまも、いといみじう、びくおそろしう
て、夜をあかすほどゝ歳をすぐすこゝちす。から

れうかい一本まえうかぶいともあり、紙れまそも考さぶうなちず。傳寫の誤りもやあるべくらん。

うじて、明けたつほどよ、これを、ぬす人の家なり。
あるじの女、げしきあることをしてなむ、ありけ
るといふ。いみじう風の吹く日、宇治の渡りをす
るよ、網代いと近うこぎよりたり。
音よのみきこゆるうらう、宇治川の、網代の
浪も、げふぞかぞふる、二三年、四五年、へぶてたる
ことを、ものぶいもなく、かきつくれど、やどて、つゞ
きだちたる、修行者めきたれど、さまをあらず。年
月へぶれる事なり。春頃、鞍馬よ籠りたり。山ぎ
を、暁ごとに、のぼりやのなるよ、山のかなより、つゞ

のよ、ところなど、ほりもてくるも、杉のしゐづる道も、花もみな、散りたてよけれど、何ともなきを、十月ばかりよ、まうづるよ、道のほど、山のけしき、此頃を、いみじうぞ、あさる物なりける。山のも、紅葉をひろげたるやうなり。たぎりて、流れ行く水晶を、ちらすやうよ、ひきかくるなど、いづれよも、すぐれたり。まうでつきて、僧坊よいきつきたるほど、かきもぐれたる、紅葉の、たぐひなくぞ、みゆるや。

奥山の、紅葉の縁、外よりも、いのよ、もぐれて、ふ

かくそめけむ、とぞ、みやらる。二年ばかりありて、又、石山よ籠りたれば、夜もすがら、雨ぞいみじくふる。旅居を、雨いとむつかしきものときくて、もとよみおしあけて、みれば、在明の月の、谷のそこさへ、曇りなくすみわたり、雨と聞こえつるは、木のねより、水の流るる音なり。

谷川の、流れを雨と、聞こゆれど、外よりけなる、左明の月まさ、初瀬よまうづれば、ばかりよ、よなよなたのもし。慶々よまうけなどして、いきもやらず。山城の國、そその社などよ、紅葉いと

ねの〜きほどなり。初瀬川をもるゝよ、

初瀬川、立ち帰りつゝ、ゑぬれど、杉のもゝ〜

もゝのたびやみむと思ふもいとたのもし。三は

さぶらひてまゐでぬれど、例のならぐるのこな

さよ、小富などよ、呼度をいとるゝひろけれど、え

やどるまじうて、野中よりそめよ庵つくりて、

すゑゝれど、人をたゞ、野よゐて、夜をあのす。草の

上よ、むとのぐきなどをらちきてうゝよ、席をも

きていとゝのなくて、夜をあのす。からも、ちゝぐ

よ、嘉わく。曉ごゝの月いとゝいみじくすみ渡りて、

よよ志らず、おかし。

ゆくへなき旅のそらをも、おくれぬゝ、都まで

みし、立明の月、何事も、心よかなゝぬ事もなき

まゝよ、かやうよたちゝなれゝる、物まうでをし

ても、道のほどをねのしとも、苦しとも、みるよ、お

のづゝら、心も慰めさりとも、たのもしう、さしあ

りて、嘆げのしなど、おぼゆることども、ないまゝ

よ、たゞ、をさなき人々をいつしかの、思ふさまよし

たゝ〜ゝんと、思ふよ、年月の、過ぎ行くを、心もと

なく、たのむ人だよ、ひとのやうなる、よろこびー

てをとのみ思ひ渡すほちたのもしこうし。古いみじうかゝらひ、よるひる、歌などよみかはし、人の、ありくてもいと、昔のやうよりてあらねたえずいひ渡る。越前守のよめまてくぐりしぎかきたえ、音もせぬよりうゝじてたより弱ねてこれより、

たえざりし思ひも今をたえまけり、こゝの渡りの雪のふるのさよといひたる、返りごとよ、

白山の、雪のしたなる、さゝれ石の、中の思ひを、消えん物こそ、やはひのつゝもち頃よ、西山の、奥

返りごとも、かゝてといふべき所なり。

いきたるの下よむ、ゆゑ字をあけり。

なる所よ、いきたる、人目もみえず、のどくと、霧みつゝたゝるよ、あそれよ、心細く、花だにのり咲きみぶれたる。

里遠みあまり奥なる山路よを、花みよとても、人こざりけり、世の中、むつのうおぼゆる頃、うづまさよ流れたるよ、宮よかゝらひ咲こゆる人の、言もとより、文ある、返りごときこゆるほどよ、鐘の音の、間こゆれば、

おぼかりし、うき世のことも、忘られず、入相の鐘の、心ぼそさよとかきて、やりつゝうらくとの

どゝなる宮まゐて、同じ心なる人、三人だつの、物語
などしてまかでゝ、又のは、つれ〴〵なるまゝに、こ
ひしう思ひ出でらるれば、二人の中に、

袖ぬれて、あら磯浪と、ちりなぐら、ともに、か
づきをせしぞこひしきときこえつれば、

あら磯なあされと何のかひなくて、うしほ
にぬれて、あまの袖うらなし、いま一人、

みるめおほみる浦にあらずば、あら磯の浪ま
かぞへるあまもあらじを、同じ心に、かやうに、い
ひうそしぜの中のうきもつらきも、おとのきも、

かゝみに、いひかゝらふ人、前にくぶりてのち、
月の、いみじうあるのきに、かやう成りし夜宮に系
りてあひてを、つゆまどろまず、なごめあのいし
ものを、恋ひ〳〵思ひつゝ、森いりにけり。宮に系
りあひて、うつゝにありしやうにて、有るとみて、
うち驚きたれば、夢なりけり。月も山の端近うな
りにけり。さあざらまをとゝいとゞなごめられ
て、

夢さめて、ねざめの床の、うくぞうり、こひき
とつげよ、西へゆく月、さるべきやうありて、秋の

とふなれを八
といふなれを
を約めくるな
り。

らろ、和泉よくぶるよ、よどといふよりして道の
ほどの、おそうあそれなること、いひつくすべ
うもあらず。たのそまといふ所よ、とぶまりたる
夜いと晴きよ、拝いうふけて、舟のかぢの音き
らゆとふなれど、あそびの、来るなりけり。人々
奥ゞて、舟よ、さしつけさせたり。遠き火のひうり
よ、ひとくへの袖、長やのよ、扇さしかくして歌うく
ひたる、いとあそれよみゆ。又の日、山の端よ、日の
かくるほど、住吉の浦をすぐ。元もひくつよ、霧波
れる、松の梢も、海のおもても、波のよせくる、渚の

ほども、忘よかきても、およぶべきかたなう、おも
しろし。

いのよいひ、何よたとくてかくちまし、秋の
ゆゑべの、住吉の浦、と見つ、つなで引き過ぐる
ほど、かへりみのみ、せちられて、あうずおぼゆ。冬よ
なりて、のぼるよ、おほえといふ浦よ、舟よ、のりた
るよ、其夜、雨風、岩も動くだろう、ふうふぐきて、神
さくなりて、とぐろくよ、浪の、ちちくる音なひ、風
の吹きまどひたるさま、おそろしげなること、命
かぎりつと、思ひまどそる。岡のうくよ、舟をひき

あげて帆をおろす。雨も、やみたれど、風なほふきて、船いださず。ゆくへもなき岡のうへに、五六日をすぐす。からうじて、風いささかやみたるほど、舟のすだれまきあげて見渡せば、夕汐ただみちに、みちくるさま、とりもあへず。入江の田鶴の声をしまぬも、をかしく見ゆ。くにの人々、集りきて、そこの浦を、いでさせ給ひて、いづこに、つかせ給へらましかば、やがて、此御舟、なごりなく、なりなましなどいふ。心細う聞こゆ。

荒き海に、風よりさきに、船出して、いしづ

このわたり誤脱ありげなれど、異本どもかれこれと見合せつれども、これと覚ゆるも、なければ、今は、さてやみつ。

の波ときこえなましかば、世の中に、とにかくに、心のみつくすに、宮づかへとても、ことぞひとすぢに、つかうまつりつゝ、かたやいそのであらん、時々立ちいでば何なるべくもなきのめり。年たやしさご過ぎ行くに、つねのくしきやうなるも、つきなう、おぼえなげかるゝうちに、身の病ひいと重くなりて、心にまかせて物まうでなどせし事もえせずなりたれば、わくらばの立ち出でも、たえてながらふべき心ちも、せぬまゝに、幼き人々を、いかによもいかゞあらんよに、みおく事もおなとふ

しおき、思ひなげき、頼む人の、よろこびのほどを、心もとなく、待ちなげくるゝよ、秋よ成りて、待ちいでたるやうなれど、思ひ〳〵あらず。いと、本意なく、くちをし。親のをりより、立ち帰りつゝみし、京洛よりも、近きやうよ、周さゆれど、いとゞせん。さて、ほどもなく、くぶるべき事ども、急ぐよ、かゞでも、もすめなる人の、新ら〳〵渡りたる所よ、八月十餘日よ。渡の事を、忘らず。そのほどのありさまを、物語ゞ〳〵きまで、人、多くいきほひたり。廿七日よ、くぶるよ、男なるを、そひてくぶる。紅

のうちゝるよ、萩のあを、紫苑のありものゝ、指賛きて、たちもきて、ゐりよりて、あゆみいづるを、それも、おり物のあをよ、緋色の指貫、狩衣きてらうのほどよて、馬よのりぬ。のゝしりみちてくぶりぬる後、よなう、つれ〴〵なれど、いとゝ、遠きほどならずとて、きけば、さきゞのやうよ、心細くなども、おぼえであるよ、おくりの人々、又のは、帰りていみじう、きら〳〵しうてくぶりぬなどいひて、此暁よ、いみじくおぼきなる、人だまのたちて、京さまくなむ、きぬると、かゝれど、ものの人など

のようそをと思ひゆゝしきさまよ、思ひぶよよらむやをいまをいつるので此為き人々、おとなびさせんと、思ふより外の事なきよ、かくる年の、四月よのぼり来て、夏秋も過ぎぬ。九月廿五日より、ひ
づらひいでゝ、十月五日よ夢のやうよ、みないて思ふ心ち、世の中よ、まさたぐひある事ともおぼえず。初瀬よ、鏡奉りしよ、ふしまろびなきたる新のみえけんを、是よりそをありけれ。嬉しげなりけん新をきしかるもなのうき。今行く末をあべいやうもなし。廿三日、たとのなくも、煙よなす夜去

年の秋、いみじくもるてかしづのれてうちそひてくぶりしを見やりしをいと黒き衣のうくよ、ゆゝしげなる物をきて車のとよなくくあゆみ出でゝ行くを見いだして思ひいづるこゝち、すべて、たとくむかしなきまゝよ、やどの美濃よまどひてぞ思ふよ、其人やみよけんのしぬより、よゝなき物語、歌の事をのみ心よもあてよるひる思ひて、行ひをせましのだいとかくる夢の世をぞ見ずもやあらまし。初瀬よてまゝのたびを、稲荷より侍ふ、もるしの杉よとてなげもでられ

しをいでしまゝよ、稲荷よ、まうでたらましものを、
かゝらずやあらまし。年頃、天照御神をねんじま
れど、みゆる夢を、人の御めのとして内ゐるうよ
あり。帝、后の御影よりかくるべきさまをのみ、夢と
きもあをせ。おども、其事をひとつかなをで、や
みぬ。たゞ、御ゝげなりとみ、鏡の影のみ、たゞを
ぬ、あをれよ、心うし。かうのみ心よ、物のかなふ方
なうて、やみぬる人なれど、功徳も、つくらずなど
して、たゞよふ。さすがよ、命を憂きまも、たえず、
なぐらふめれど、後の世も、思ふかなをずぞあ

らんゝとぞうゝろめるきよ、たのむ事ひとつ
ぞありける。天喜三年、十月十三日の夜の夢よみる
る所の屋のつまの庭よ、阿弥陀佛たち給へり。
さぶのまを、みえたまをず。影ひとへ隔てるや
うよ、すきてみえ給ふをせめて、たえまよ、見まれ
ど、蓮花の坐の、つちをあゞりゝる、高さ三四尺佛
の御たけ、六尺ばかりみて、金色よ、ひかりかゞや
き給ひて、ほゝ、かゝつゝをぞ、ひろげるやう
よ、いまかゝつゝみを、みんをつくり給ひる
をゝと人の目みを見つけまらず。我一人見まり

てさすがよいみじくけおそろしけれどずゝ
のもとに近くよりてもえ見まらねど、佛さえ四度
たかへりて後むのへよ来んと、宣ふ聲ゝごの耳ひ
とつよ生きゐて、人をえ聞きつけずとみるよう
ち驚きゐれど、十四日なり。この夢ぞゐりぞ、後の
たのみとしけるを、人もなどひとゝ所まて、朝夕みな
るよかうあそれよ悲しきことの後を、所々よな
りなどして、誰れもみゆることかうあるよい
と暗い夜六ちちよあなるをひの来るよめづ
らしうおぼえて、

月も出でゝやみよくれたる、捨て何とて
こよひ弱ねきつらんとぞいそれよける。愁よか
らふ人の、かうて後、音づれぬよ、
今を世よあらじものとや思ふらん、あそれ
なくゝなほこそそこれ十月ぞう月のいみ
じうあるきをなくゝなどめて、
ひよもなき涙よくもる心よもあうとみ
ゆる月の新なな年月をすぎぞうゆけど、夢の
やうなりしほどを思ひいづれど、心ちもまどひ、
目もかきくらすやうなれど其ほどの事をまゝ

さぶかるまおぼえず。人々をみな、外よりすみあぐ
れて、故郷よりひとり、いみじう心ぼそく、悲しくて、
なぐめあへるに、ひとりおとづれぬ人よ、
　　歳ゆくよりもきぬ露よりそほちつゝ人とと
もにぬ音をのみぞなく、あまたなる人なり。
　　世のつねの、やどのよりもぎよ、思ひやれそむ
きてたる、庭のくさむら、

和文教科書六之巻終

明治十九年十二月十七日版權免許
明治二十年一月　出版

第一帙定價金五拾錢
第二帙定價金五拾錢
第三帙定價金五拾錢

編輯人　下田歌子　東京四谷尾張町九番地
出版人　平尾錦藏　東京四谷尾張町九番地
製本兼發兌元　中央堂　宮川保全　東京神田猿樂町三丁目一番地
發兌元　十一堂　明石範貞　東京京橋南鍋町三丁目三番地

賣捌元　東京日本橋横山町二丁目　十一堂支店
大阪心齋橋通北久寶寺町　三木佐助